

表1 招聘講師・演題一覧

1) 国外からの演者：7名

	氏名	演題
1	Samantha J. Richardson (RMIT University, Australia)	Evolution from 5-hydroxyisourate hydrolase to transthyretin
2	Per Westermark (Uppsala University, Sweden)	Transthyretin and aging
3	Maria J. Saraiva (Instituto de Biologia Molecular e Celular - IBMC, Portugal)	Transthyretin: roles in the nervous system beyond thyroxine transport
4	Wan Sung Choi (Gyeongsang National University, South Korea)	Clusterin regulates transthyretin amyloidosis and apoptotic cell death
5	He Huang (Zhejiang University School of Medicine, China)	Plasma proteins: new biomarkers in the diagnosis of complications and predicting outcomes of allogeneic hematopoietic stem cell transplantation
6	Shumin Duan (Zhejiang University School of Medicine, China)	Physiological and pathological roles of glial cell-released ATP through lysosomal exocytosis
7	Giampoulo Merlini (University of Pavia, Italy)	Amyloidogenic light chains: mechanisms of tissue targeting and damage

2) 国内からの演者：7名

	氏名	演題
1	Keiji Tanaka (Tokyo Metropolitan Institute of Medical Sciences)	Physiological and pathological roles of eukaryotic proteasomes
2	Tamotsu Yoshimori (Osaka University)	Autophagy: molecular machinery and role in disease
3	Hirofumi Kai (Kumamoto University)	Intracellular trafficking of amyloidogenic TTR and its therapeutic implications
4	Mitsuharu Ueda (Kumamoto University)	Amyloidogenicity and animal models
5	Toshiyuki Yamada (Jichi Medical University)	Laboratory medicine in amyloidogenic plasma proteins
6	Toru Maruyama (Kumamoto University)	Albumin: novel functions and its clinical use
7	Keiichi Higuchi (Shinshu University)	Plasma apolipoprotein A-II deposits as amyloid fibril in mouse transmissible systemic amyloidosis

〇〇名以上の参加者があり、成功裡に終わっております。近年、アミロイドシスは世界的な広がりを見せ、患者数が増加している難治性疾患の一つです。アルツハイマー病、プリオン病なども本疾患群に含まれます。また、本疾患群の発症には加齢が大きく関与することから、高齢化社会を迎えた我が国においても、その治療研究の重要性は益々高まっています。さらに、アミロイドに類似した蛋白質のミスフォールディングを原因とする疾患群も数多く存在します。様々な蛋白

質の性質や機能、アミロイド沈着機構、そして様々なアミロイドシスの病態・治療研究などに関して多くの新たな知見が得られた本シンポジウムは、今後のアミロイドシス、さらにはミスフォールディング病全般に対する治療法開発、確立に向けての礎となったものと考えております。

末尾となりましたが、本会の開催にあたりご協力を賜りました公益財団法人肥後医育振興会様、ならびに当日座長の労を賜りました学内の諸先生方に心より

感謝申し上げます。

第二十七回熊本医学・生物科学国際シンポジウム 会長

安東由喜雄

平成二十三年度熊本大学病院群 卒業臨床研修プログラムの報告

熊本大学医学部附属病院総合臨床研修センターの「熊本大学医学部附属病院卒業臨床研修プログラム研修医育成」に対し、肥後医育振興会から平成二十三年度助成金を賜り、心より御礼申し上げます。

当センターは「優れた医療人の育成」を目指して平成十二年十月に院内に設置され、今年で十二年目を迎えます。その間に、平成十六年の新医師臨床研修制度の導入という大きな変革があり、また、医師不足・地域医療崩壊など医療情勢も大きく変化し、社会環境も含めて厳しさを増したことはご周知の通りです。熊本大学医学部附属病院も新しく建て替わり、平成十九年から附属病院内の中央診療棟七階に研修センターは移設されました。その後旧病棟は全て取り壊され、現在外来棟新設の準備に入っています。

平成二十三年の当院プログラムに一年次初期研修医は四十九名を迎えましたが、一〇月には次年度研修予定者が決まり、定員六十三名に対し、六十二名マッチ（九八・四％）という結果でした。これは新研修制度始まって以来の好成績であり、国立大学では九州内トップ、国内で東京医科歯科大に次ぐ全国二位の高いマッチ率でした。マッチ率の向上を目指してプログラム改訂、研修環境改善、県外説明会、HPの充実などに取り組んで

参りましたが、病院群指導医の先生方の熱意が伝わり、本学の研修内容が研修希望者に受け入れられたことが最も大きな要因であろうと考えています。日ごろから学内外の指導医の先生方の、プログラム運営に対するご協力を心より感謝申し上げます。

さて、一方平成二十三年度末で二年間の研修を終え、五十六名の研修医が無事に研修を終了し専門修練の道へ進みました。多岐にわたる研修目標到達のための課題へ取り組み、各人が二年間努力した結果、全研修内容を終了することができました。一年時からかなり計画的に進捗し、見ていて安心できる研修医もいれば、一方でなかなか成果を出せない（出してくれない）研修医もいました。熊大病院群のプログラムのように自由度や選択性の高いプログラムでは、方向を誤ると必修研修項目を逸するケースもあるので、本人や指導医、研修病院と相談しながら一定の調整をはかる必要が出てきます。特に二十三年度修了者は研修制度の改変により必修診療科が軽減され、自由選択期間が大幅に拡大された最初の研修医でした。従って、それまでの六期と異なり、自由選択研修の内容が注目され、当院プログラムにおける選択診療科の検討については今年の第四十四回医学教育学会でも報告させて頂きました。この自由選択期間は今後の進路に繋がるキャリアパスの一環として専攻する診療科での長期研修となる可能性が考えられていたことが、今回の結果では選択診療科した科数は五・六診療科、一診療科の在籍は二ヶ月弱と比較的短い研修を複数科で行う傾向が認められました。確かに、長期的に在